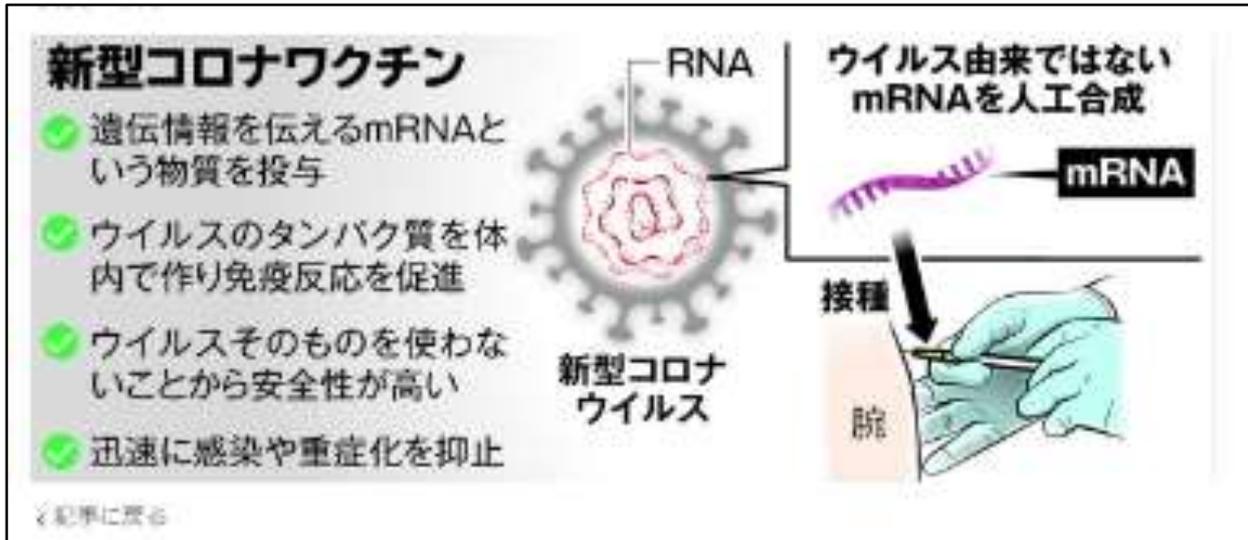


新型コロナ禍に「希望の光」だったワクチン 医療、介護現場から感謝と受賞たたえる声

10/2 産経新聞

ノーベル生理学・医学賞に選ばれた米ペンシルベニア大のカタリン・カリコ特任教授（68）とドリュー・ワイスマン教授（64）の研究は日常生活を激変させた新型コロナウイルスのワクチン開発につながり、感染拡大を食い止めた。「ワクチンは希望の光だった」。医療や介護の現場からはワクチンに感謝し、カリコ氏らの受賞をたたえる声が上がった。



「ワクチンを打ってれば、重症化しにくい。効果を実感している」。令和2年5月から5年5月まで、コロナ専門病院として患者を受け入れた大阪市立十三市民病院（同市淀川区）の後藤哲志・感染症内科部長（58）はこう語る。

「健康で若い人でも肺炎になり、肺炎で亡くなる人も多かった」とコロナ禍を振り返る後藤部長。病床逼迫（ひっぱく）で神経をすり減らす日々を送った。

そんな中で切り札として期待されたのが、ワクチンだった。カリコ氏らの研究を基に、米製薬会社がワクチンを開発。日本では3年に接種が始まった。「ワクチンがなければ、もっと多くの死者が出ていたのではないか」。後藤部長は実感を含めた。



9月、介護老人保健施設「さくらがわ」で始まった改良型ワクチンの接種＝大阪市浪速区（南雲都撮影）（株式会社 産経デジタル）

高齢者施設もコロナ禍の影響を大きく受けた。大阪市の介護老人保健施設「さくらがわ」副施設長の北谷善寛さん（48）は感染拡大初期について、感染者が出た施設への誹謗（ひぼう）中傷もあったため、「感染に過敏になった」と話す。施設内でのイベントや外出は減らし、入所者と家族との面会もスト

ップした。認知症の入所者の症状は顕著に進行、スタッフらは心を痛めた。感染すれば命を失いかねない高齢者が集団生活を送る上で、ワクチンは「希望の光だった」（北谷さん）という。

ワクチン接種が大きな後押しとなり、徐々に日常生活が戻ってきた。さくらがわでは昨年未ごろから、パーティションや時間制限などで感染対策を講じつつ面会を再開。入所者や家族からは安堵（あんど）の声が聞かれたという。

北谷さんはカリコ氏らの受賞について「ワクチンの開発にご尽力いただき、精神面で大きな安心感につながり、ありがたかった。おめでとうございます」とたたえた。

その上で「まだコロナがなくなったわけではなく、変異株も出てきて予断を許さない状況。ワクチンも、さらに発展したものが出てくれば」と期待を込めた。